令和5年度　第45回「少年の主張」安中市大会　最優秀賞作品

「大好きな故郷を守るために」

安中市立松井田中学校　3年　多胡　絢稀

私の祖父、私の一番の理解者でいつも前向きな思考しか持ち合わせていない人。私が何かに挑戦したいといえば誰よりも応援してくれる人。三十四年前に祖母と二人で始めた寿司屋は富岡市の郊外にあり、市街地からはかなり離れた場所にある。祖父は寿司職人であることに誇りを持っており、お店には祖父と話したい、祖父の寿司を食べたいという人達でカウンターが埋め尽くされていた。賑やかで笑い声が飛び交う店内から「美味しい」と聞こえてくると、私が言われたわけではないが、ニヤリと嬉しい気持ちになったことを今でも覚えている。しかし四年前の春、地域の人から長年愛されていたお店はのれんをおろしてしまった。

そんなことをふと思い出したのは、あるテレビの報道番組を見ていた時のことだ。その番組では東京で七十歳を超えた寿司職人が今もなお現役という特集だった。私の祖父は当時六十五歳、この方よりも若い。それなのになぜお店を続けることをしなかったのだろうと疑問に思った。そこで理由を聞いてみた。すると祖父は「以前から六十五歳で引退するというライフプランを立てていた」こと。「物価の高騰」や「周辺地域の高齢化、人口の減少」の三つが理由だったと教えてくれた。その時、人口の減少という言葉を聞いて、「どうして田舎から人は出ていってしまうのだろう。」と寂しさを感じたと同時に「またか…」と悔しい気持ちにもなった。

私が住んでいるこの松井田地域は以前から段々と人口が減り、安中市と合併したが、新しい人がなかなか入って来ない。それどころか人口は更に減り続け、かつて松井田町内に四校あった中学校は昨年春、一校に統合された。

このような少子高齢化は松井田や群馬県内だけでなく、日本全域の田舎で問題となっている。今後、私達が大人になった時、松井田、安中はどうなってしまうのだろうか。このまま少子高齢化問題に対して、指をくわえて見ていることしかできないのだろうか。

そこで私は考えた。この地域で育った子どもが地元で働き、家庭を築き、子どもを育てて人口を増やすことが必要である。これも一つの地域への恩返し、地域への貢献なのだと。

私が習った国語の教科書に「不便の価値を見つめ直す」という単元があり、その中で「不便益」という言葉が出てきた。不便の中にも良い面があるという意味である。

始めにお話したように祖父のお店は不便な場所にあったが、それでも遠方は新潟から足を運んでくださるお客さんもいた。現在はICTの発達により、以前なら都会に行かなければできなかった仕事が、地方にいてもできるよう変化している。つまり、魅力さえあれば、どんなに不便な場所であったとしても人は訪れてくれるのだ。だからこそ、この地域にしかない自然や文化、そしてお店などの魅力に地元の人たちが気づき、県外へ発信していくことが、ひとつの鍵なのだと私は思う。都会にはない地元の「美しいもの、美味しいもの」、これらが、故郷で生活する不便益なのかもしれない。

私には将来二つの大きな夢がある。

まず一つ目は、私の住む地域に興味を持つ県外の人達や、就職で県外に出た人が故郷へ訪れたいと思えるような地域をつくることだ。そして二つ目は、祖父のように私自身も仕事に誇りを持ち、地域貢献をしながら少子高齢化を考え、群馬県の人口を二百万人に戻したいという夢だ。しかし、これらの夢は私一人の力で叶えられるものではない。

私は松井田が、群馬が大好きだ。皆さん、自分たちの育った故郷で過ごし、地域への恩返しをしよう。故郷を守っていけるのはここで育った私たちなのだから。